



2025年4月17日
地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター

補聴器装着により歩行機能も改善する可能性が明らかに

○ 発表内容の概要

東京都健康長寿医療センター研究所の桜井良太研究員の研究グループは、少数のサンプルを対象とした予備的介入研究から、加齢性難聴患者が補聴器を装着することにより、認知機能のみならず歩行機能も改善する可能性があることを明らかにしました。この研究成果は、国際雑誌「*Audiology and Neurotology*」オンライン版（2月28日付）に掲載されました。

○ 研究成果の概要

高齢期の聴力低下は認知症発症や転倒発生、社会的孤立のリスク要因であることが知られています。そのため補聴器の装着といった早期の介入が望まれており、それにより認知機能低下や社会的孤立の発生を予防する可能性が示されてきました。しかしながら、この補聴器装着が高齢者の運動機能にどのような影響を与えるかについては明らかではありませんでした。そこで我々の研究チームは歩行機能に着目し、その影響を検討しました。

2020年から2021年の間に、当医療センター耳鼻咽喉科にて加齢性難聴と診断され補聴器の装着を勧められた患者のうち、研究参加に同意した10名を研究参加者とししました。研究参加者の補聴器装着直後と補聴器装着1年後に複合的な調査を行い、その影響を検討しました。

補聴器装着1年後調査の結果（図参照）¹、補聴器の装着により、歩行中の1歩に要する時間が顕著に短縮しました。これは、補聴器によって歩行時の足の動き（足の回転）が改善されたことを示しています。さらに、このような歩行機能の向上に伴い、参加者の転倒に対する恐怖感が軽減されたことも確認されました。加えて、全般的な認知機能（MoCA：Montreal Cognitive Assessment）、記憶機能（ロジカルメモリーテスト：遅延再生課題得点）、およびウェルビーイングの指標（WHO-5）においても改善が見られ、補聴器装着が多面にわたるポジティブな影響をもたらすことが明らかになりました。

¹ 追跡期間中、1名の参加者が研究を途中で中止。そのため、この参加者については、補聴器装着直後のデータを補聴器装着1年後のデータとして扱い、解析を実施。

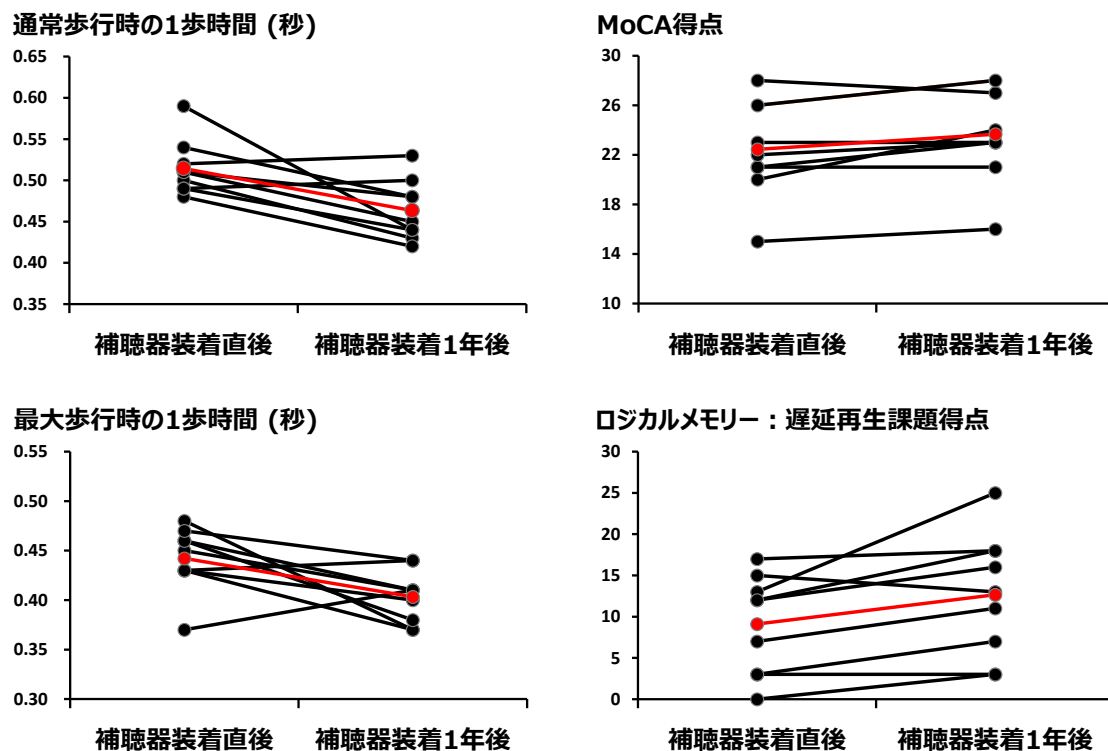


図. 補聴器装着に伴い有意に改善が認められた歩行・認知機能項目

補聴器装着に伴い、ほぼ全員の通常歩行時と早歩き時の1歩にかかる時間が短縮しているのが分かる（左）。また全般的な認知機能を測定するMoCAと記憶機能を測定するロジカルメモリーにおいても、同様の傾向（得点の増加）が認められている。

○ 研究成果の意義

これまでの我々の研究から、聴覚が歩行動作に密接に関与していること、そして加齢性難聴者において歩行機能の低下が見られる傾向が明らかになっています。本研究は、少数のサンプルを対象としており、介入効果を厳密に検証する無作為化比較試験ではないため、解釈には注意が必要です。しかし、本研究の結果は、加齢性難聴による聴力の低下を補聴器によって改善することで、歩行機能の向上が期待できる可能性を示唆しています。

このような補聴器の利点を踏まえると、「耳の聞こえの問題」に対する早期の対応が、安全で質の高い生活を実現するために重要であると考えられます。

○ 掲載論文

国際科学雑誌「Audiology and Neurotology」（現地時間2月28日）

Effects of wearing hearing aids on gait and cognition: A pilot study

（補聴器装着が歩行と認知機能に与える影響に関する予備的研究）

（問い合わせ先）

東京都健康長寿医療センター研究所
 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 桜井良太
 電話 03-6905-6781 Email: sakurair@tmig.or.jp